

平成二十五年十二月十日発行
皇學館論叢第四十六卷第六号 抜刷

第六回皇學館大學人文學會大会シンポジウム

「伊勢の式年遷宮を考える」

(発題・討論) 皇學館大学文学部教授

(討 論) 京都大学名誉教授

國學院大學神道文化学部教授

神宮権禰宜

(司 会) 皇學館大学非常勤講師

岡 勝 茂 吉 千

田 山 木 川 種

清 貞 竜 清

登 次 純 実 美

第六回皇學館大學人文學會大会シンポジウム

「伊勢の式年遷宮を考える」

(千種清美)

第六回皇學館大學人文學會大会シンポジウム「伊勢の式年遷宮を考える」を始めさせて頂きます。挨拶と趣旨説明を兼ねまして、発題者の岡田登先生にご登壇頂きたいと思ひます。シンポジウムの論点を提起して頂きたいと思ひます。

発 題

皇學館大學文学部教授

岡 田 登

一、はじめに

今回、人文学会では「伊勢の式年遷宮を考える」というテーマで、シンポジウムを開催させていただくことになりました。今年は、第六十二回式年遷宮の年に当っており、皇學館大學でも、式年遷宮について、学術的な研究会を開

催して、討論してもよいのではないかとということ、午前中を研究発表とし、午後はこの会を開かせていただくことになりました。

まず初めに、皇學館大学のことを少しお話しておきます。昨年、本学は創立百三十周年、再興五十周年を迎えました。本学は、明治十五年（一八八二）に、神宮祭主久邇宮朝彦親王の令達（思召し）で、創立されました。そして、親王の代理として神宮権宮司の藤岡好古から内務卿に提出された皇學館開設の伺書には、「本館設立の大義は、専ら神宮に関する古伝を明らかにし、其他神典・国史・律令・格式・地理・物産・民族・語学等に至り、生徒をして之を習熟せしめ、以て其成材を要す」と、その目的が記されています。私たち皇學館の教職員学生は、明治三十三年（一九〇〇）の賀陽宮邦憲王令旨を建学の精神として捉えています。本学は明治十五年にできていますので、三十三年までは建学の精神がなかったのかと言われることになりました。創立当時は、「神宮の古伝を明らかにする」ということが謳われていますので、皇學館の教職員学生は、神宮のことについて、よく理解し、よく人に伝えることができることが、基本になっていると思います。

朝彦親王が、このような思いを持たれたのは何故かと申しますと、明治四年（一八七二）の五月に、古代以来続いた世襲神職（内宮は荒木田氏、外宮は度会氏）が、その五月に、明日から神宮に勤務しなくてよい。新たに政府が任命した神職に、神宮を任せるということになりました。また、その二ヶ月後には、神職のほとんどが伊勢の信仰を伝える御師おしとなり、北海道南端の松前から南は九州の鹿児島まで、お札（劍先祓・箱祓）を配って伊勢信仰を伝えていた人々も、二ヶ月後には「明日から、この生業（配札・伊勢曆頒布、檀家の止宿・神樂奉奏・祈祷など）を一切してはいけない」と禁止されてしまいました。それ以降、伊勢の町は、宗教都市としての姿（街道沿いに御師邸が薨を並べる町並）を大きく変え、今のようになっっています。

そういつた中、幕末争乱期に政治的活動をした朝彦親王は、維新後は神宮祭主に任じられ、京都に住み、『日本書紀』とか『古事記』などを学ばなければならないと、ご自身の邸宅で勉強会を開かれました。そして、勉強会をされる中で、神宮の神職（禰宜たち）にも京都に来るようにいわれ、祭主自ら、これはどういう意味があるのか、神宮ではどうなっているのかと問われたら、新たに任命された神職は、親王の御下問に「よく分かりません。明治四年の五月に任用をされていますので、それ以前の古い時代のことは全く分かりません」という状況であったようです。そういつた中で、その十年後、恐らくこの十年間に、神宮では色々な問題が蓄積され、神宮の古伝を明確にし、理解するという学問所が必要になり、皇學館は宇治の林崎文庫に創立されたと思います。皇學館の本質というものは、この伊勢の地にある限り、神宮の古伝を追い求める必要があると思います。もし、世襲神職や御師が廃止されていなかったら、皇學館大学はなかったし、今日のようなシンポジウムも開かれなかったと思います。人文学会は、文学部の教員学生を中心に、構成されていますので、大学創立の趣旨を理解するためにも、こういったシンポジウムを開催することは、大変意義があるのではないかと思います。東京では、國學院大學を中心に、盛んに伊勢神宮のことを考えるシンポジウムなどが、開催されています。ところが、この伊勢ではどうかといえますと、少し寂しいようで、本会の委員の皆さんに諮り、このようなシンポジウムを開催させていただいたわけです。

そして、テーマを「伊勢の式年遷宮を考える」とさせていただいたのは、何故かと申しますと、今回の式年遷宮については、マスコミの多くが、あるいは書店に並ぶ関係の本の多くが、出雲と伊勢が式年遷宮の年に当たっていることを捉え、注目しています。出雲大社は六十年、伊勢の神宮は二十年ごとの式年遷宮で、これが、たまたま重なったのが今年です。神宮では、昭和二十四年（一九四九）に、第五十九回式年遷宮が行なわれるはずでしたが、敗戦後に参宮された天皇の思召しによって、延期することになり、昭和二十八年（一九五三）に式年遷宮が行なわれました。そ

して、出雲の六十年と伊勢の二十年が重なって、どちらかという観光の一つの目玉として、ある意味では神々のことを考える絶好のチャンスとして、捉えられています。今年が、出雲と伊勢を考えるよい機会となったわけです。そういった中で、私たち伊勢にある大学としても、伊勢の式年遷宮をしっかりと考えてみようというわけです。

式年遷宮そのものは、古代の史料をみると、大阪府の住吉大社、あるいは茨城県の鹿島神宮、千葉県の香取神宮の三宮社は、平安時代の正史である『日本後紀』の弘仁三年（八二二）六月辛卯（五日）条に、

神祇官言。住吉香取鹿島三神社。隔_二廿箇年_一。皆改作。積習為_レ常。其弊不_レ少。今須_下除_二正殿_一外。随_レ破修理上。永為_二恒例_一。許_レ之。

とあり、二十年ごとに式年遷宮を行なっていたことが出ています。ただ、弊害が多いので、正宮だけにして、あとは破損に随って修理をするように、ということが出ています。伊勢の神宮では、逆に古代以来遷宮対象のお宮が拡大されてきていることを、これからお話ししていきたいと思っています。時間が足りないところは、後ほどの討論の中で、勝山清次先生、茂木貞純先生、吉川竜実先生に、いろいろと補って頂いて、そして討論に入っていきたいと考えています。まず、既にご存知だと思えますが、私の考えている皇大神宮と豊受大神宮について、少しお話しさせていただきました。と思います。

二、内・外両宮の創祀

皇大神宮（内宮）ですが、基本的には垂仁天皇二十六年丁巳の年、西暦二九七年、三世紀末頃に創祀されたと考えられています。それから、豊受大神宮（外宮）、豊受大御神、これは食の神ですが、現在では衣食住の神で、衣

と住が加わり、あらゆる産業の神とされていますが、私は食のみオンリーの神と考えています。神宮の方では、雄略天皇二十二年（四七八）としていますが、『太神宮諸雜事記』に見えるもう一つの創祀時期である同天皇二十一年丁巳（四七七）は、皇大神宮創祀年の干支である丁巳に合わせて、丹波国、後の丹後国から、この地に遷されたと考えられています。いずれにしても五世紀の後半になります。

天照大御神は、日の神・太陽神と考えて問題はないと考えています。『紀記』の神代巻を見ていただいたら、天の岩戸隠れで、世の中が真っ暗になったことが記されています。太陽の日食を表現したものと考えれば、アマテラス（天を照らす）という言葉、あるいは大日雲（大日留女）という名から考えても、太陽神と理解してよいと思います。ただ残念ながら、戦後の歴史学界の多くの研究者は、崇神天皇、あるいは垂仁天皇などの存在を疑い、実在を認めません。皇學館と國學院だけが、頑張って『古事記』・『日本書紀』の正当性を、話さざるを得ないような形になっているのではないかと、思っています。

天照大御神は、大倭（現在の奈良県桜井市）で祀られていたものがこの伊勢へ、それから豊受大御神は丹後国（現在の京都府京丹後市）から、こちらに遷されたという形となっています。なぜ天照大御神が、この地に移されたかという点、『日本書紀』に天照大御神の教えとして、「神風の伊勢国は常世の浪の重浪帰する国なり。傍国の可恰し国なり。是の国に居らんと欲す」とあります。この常世というのはどこかと言いますと、海の彼方の永遠の命を育む場所です。日本の周囲には、海がありますが、間違はなく、大倭から見た東の海、そこに常世を考えています。そして、この「海」という字は、音では「カイ」ですが、訓では「うみ」です。この「うみ」という訓は、いったい何かと言いますと、「生」・「産」です。これは、いずれも「うみ」と読みます。つまり、東の海を真っ赤に染め上げて、大きな太陽が昇ってきて来ます。東の海のかなたの、常世の国の永遠の命を育むところから、毎日太陽は生まれ、西の海で毎日亡くなって

いると、古代人は考えていたのではないかと思えます。亡くなるといっても、海に深く消えて、朝になつたら東から昇つてこられるというように考えていたと思えます。なぜ、神嘗祭は夜行なわれるのか。あるいは式年遷宮の遷御の儀が、なぜ淨闇、真つ暗な闇の中（但し、神嘗祭や遷御が行なわれる九月十五～十七日は、旧暦では満月の日で、天照大御神の弟神、月読神の助けを受けることとなる）で行なわれるのか。おそらく東の海から昇つてこられた時は、人の世界を照らし、神の世界は夜という思いが、ここにはあると思えます。

そして、倭姫命が、この地に天照大御神を遷されましたが、豊受大御神はなぜ丹波国から遷されたかと申しますと、倭姫命のお母さんは日葉酢媛命ひばすひのめで、そのお父さんは丹波道主命たんばみちのすけです。外宮は、雄略天皇の時に、この伊勢の地に天照大御神を遷された倭姫命の母方の出身地、丹波国から食の神を求めたのではないかと思えます。倭姫命は、伊勢の地に天照大御神を遷して、祠を五十鈴川の川上（川のほとり）に建てた時に、祠の近くに建てた齋宮に住み、日別朝夕の大御饌を大御神に捧げていたと思えます。ですから、初代の倭姫命がご自身の出自する丹波の地で祀られていた豊受大御神を、食の神として、伊勢の地に遷されたと思えます。

三、神宮の構成と経営

神宮は、正宮・別宮・摂社・末社・所管社・別宮所管社の百二十五の宮社で構成されています。神の数にすると百四十一座です。その分布につきましては、内宮側は、宮川を渡った玉城町を中心に分布しています。それから、外宮の摂末社は、宮川と勢田川に挟まれた地域に主として分布しています。そして、この百二十五の宮社を総称して、「神宮」と呼んでいます。この摂社・末社・所管社にあたる社は、基本的には、天照大御神、あるいは豊受大御神が、この地に遷される以前から、この地で祀られていた神々で、場合によると縄文時代、弥生時代以来、ずっと古くから、

この地で祀られていた神々が、神宮のファミリーとして、祀られるようになったと、理解してよいと思っています。古くからの土地の神々を、丁寧に祭祀することによって、天照大御神・豊受大御神に安んじて、この地にいただけだと、考えていたのではないかと思います。

そして、その経営にあたっては、古代では神郡である度会・多気両郡に住んでいる人々が神宮に税を出すということになっていました。その中心は、「神戸」です。伊勢国には、桑名郡から飯野郡、それから大和の宇陀郡、伊賀の神戸、近鉄の駅に伊賀神戸がありますが、駅の近辺には神宮の神戸がいたところでした。そして、志摩の国崎（現、鳥羽市）、鵜倉（以上は、南伊勢町）、そして尾張は中島郡、それから三河では渥美郡、遠江では浜名郡、こういっただとところに神戸が設置されていました。それ以外に、神田、神の田圃です。大和国の宇陀郡、伊賀・伊勢国、こういったところに田が置かれていました、そこで穫れた米は、神宮の祭典・経営に使われることになっています。式年遷宮の造営費は、基本的に古代では、神戸からの税を当てます。それを管轄していたのは、神宮の大宮司です。もし不足した場合は、正税、それぞれの国々の国庫、国司・郡司の管理する倉から、税として出すという形になっていました。ところが、この神戸とか神田とかは、律令制が崩壊してくると、税が集まらなくなり、神宮自身も荘園を持ち始めます。その荘園のことを、「御厨」とか「御園」と呼んでいます。

一四世紀頃の『神鳳鈔』には、御厨・御園は、四〇か国、一三八三か所あり、そこからの税で、神宮が経営されていたことになりました。ただ、これと式年遷宮の費用との関係は、まだ十分に明らかになっていない部分もあると思っています。おそらくここから、上がった税を使わないと式年遷宮はできなかったと思います。この御厨・御園からの税も、享徳元年（一四五二）では、一八一あったものが、大永六年（一五二六）には六八、三分の一に減っていますので、戦国乱世になると御厨・御園も激減し、遷宮を支えることもできなくなっていく状況が生まれたと思います。

神宮では、この御厨・御園に頼り、神祭りをする人々の生活も支えていました。これは基本的に、神祭りをする人があつてこそ、お宮と理解できます。変な話ですが、昭和二十年（一九四五）から二十七年に、占領軍が日本を統治していましたが、アメリカ人が神宮を祭ってくれるかと言いますと、決して祭ってくれないと思います。今の神宮の宮域に、キリスト教の教会を建てられるかもしれませんが、お宮をそのまま神祭りの対象として考えてくれない。やはり、日本人だからこそ、千数百年の歴史を持つているお宮だからこそ、そこでお祭りが続いていると思います。

そして、税収がどんどん減少していく中で、式年遷宮を考えると、重要なものがあります。「役夫工米」、「やくふくまい」あるいは「やくぶくまい」と呼んでいます。全国の公領・荘園に、式年遷宮のために、一定量のお米、初穂料を出してもらおうというものです。承保三年（一〇七六）から永享三年（一四三二）まで続いたと言われています。永享三年に、この制度がなくなつてしまうと、外宮は永享六年、内宮は寛正三年（一四六二）を最後に、遷宮は中断してしまいます。四百年間、約二十回にわたり遷宮費用を賄っていました。役夫工米は、天皇の命によって、太政官符が出されて徴税されますが、鎌倉幕府や室町幕府はどうしていたかというところ、荘園にしてもどこでも、できるだけ税を出したくない。加税免除を訴えて、だんだん役夫工米を出すところが減ってきます。源頼朝も、守護・地頭に対して、役夫工米を必ず出すようにと、出してない荘園に督促しています。同じように、室町幕府もそのことをやっています。だんだん徴収が困難になってきます。役夫工米が、設定された時期は、売位・売官、要するに成功せいこうですが、遷宮費用を出したら、希望の官職につけるということが盛んに行なわれていたようです。ただ、残っている史料が極めて少ないので、そんなにされていまいかにイメージしますが、かなり行なわれていたのではないかと思っています。そして、室町時代になると、ますます困難になり、京の洛中では地子銭、つまり土地税をかけて、式年遷宮の経費に充てるということが行なわれました。それから諸道の要所や大津に関所を設けて、関銭を集めるということも行なわ

れています。これは、往来する人が増えていることを意味します。特に、伊勢に向かう参宮街道沿いに多くの関所を設けて、関銭を取って、式年遷宮の費用に当てようという思いもあったようです。また室町幕府は、貿易で多額の利益を得ました天龍寺船に倣って、造大神宮船を派遣しようと考えていたようですが、これは出すところまでいかなかったようです。こういった式年遷宮、あるいは神宮そのものの経営が、より困難となったのは、室町・戦国の乱世の時代になってきたからです。

近世では、宮川以東を神領地、宮川よりも東側は神宮に付属した土地としています。これは、豊臣秀吉が検地をしないことを認め、徳川家康もそれを踏襲して、江戸時代を通じて認めていました。そして、明治になると神領は、全て国へ移管され、神宮独自の経済基盤を全く失ってしまいます。けれども、国家が経営するという形で、国の税金から捻出した経費で行なう国家管理のお宮になります。ですから、明治時代の神宮の職員は、国家公務員となっています。なぜ、御師や世襲神職が廃止になったかというと、国から神職の給料を出すことになりましたので、たくさん神職がいますと大変ですので、これを減らさないとけない。あの人を残して、この人は残さないとはなかなかできませんので、全員リストラ（一部、内宮側は一欄宜家の藤波、外宮側は松木家を残す）して、政府が新たに雇用するということになりました。そういう方針が出たのは、まさにこの明治です。よく明治初年に行なわれた廃仏毀釈が問題にされますが、この宇治と山田、内宮と外宮のあった町からしますと、廃仏毀釈以上の、大変なことが起こっていたということです。ですから、この宮川を渡った山田と宇治には、御師の館が街道沿いに累々と薨を並べ、神宮文庫の黒門（山田の福島御塩焼大夫邸の門）のような巨大な門を持った家が、街道沿いに建っていたわけですが、それが今はほとんど残っていません。もし、これらが残っていたら、京都や奈良の町屋や寺町が残っていると同じですから、多くの人や修学旅行生がもつと来ていたし、世界中の人が来ただろうと思います。パチカンだとか、エルサレムだとか、

世界の宗教都市となんら遜色することのないほどの、すばらしい聖地の町並みが、ここにはあったわけです。しかし、この明治四年の政策で、伊勢は一変したということを、注目していただきたいと思います。そして、昭和二十年以降は、国家管理を離れ、神宮も一宗教法人となっています。こういったことを、踏まえながら、式年遷宮の問題を考えていこうと思います。

四、社殿の造営

式年遷宮とは、どのようなものかということは、皆さんもよくご存知のように、二十年ごとに殿舎を建て替え、別宮以上の御神宝・装束を新しく作り直すというものです。そして、遷宮そのものの内容を個別に見ていきますと、まず建物の造営です。古代では、造宮使という人々が都から来ています。伊勢の大工が建てるのではなく、都から使いが派遣されます。「長官・次官・判官・主典」の四等官（事務官）と「木工長上」、基本的にはこの木工長上が、大工の棟梁にあたります。そして、「番上工四十人」とありますので、大工さんたちも、この伊勢にやって来るといこととです。宮殿建築で、巨大な材木を切ったり削ったり、そういう技術を持った集団が、伊勢にやって来ます。この人達が来なければ、伊勢では神宮のお宮を建て替えることが出来なかったということになります。それから、「役夫」です。大工だけではなく、今のようにブルドーザーとかダンプカーとかトラックなどはありませんので、人力に頼らざるをえません。人力ということであると、神戸の民がこの伊勢の地にやって来ます。先に述べたように、伊勢・大和・伊賀・志摩・美濃・尾張・三河・遠江など、主に東海地方の人々が、この伊勢にやって来ます。国司と郡司が、それぞれ一人ずつついてやって来ます。つまり、式年遷宮の時には、この伊勢の町にはかなり多くの人々が、遠くか

らやって来ていたということですから。これは、今でいう一日神領民とか、あるいは特別神領民とか呼ばれるものの、淵源にあたるものです。

そして、中世になると財政面でも難しくなるし、国司あるいは郡司などの地方制度も崩壊し、新たな形のを創り出さないといけないことになってきます。やはり造宮使そのものは、都からやってきます。特に、「伊勢遷宮行事」という中央の役人が任じられて、そういった人々が何々行事、あるいは「上卿」と呼ばれ、遷宮の支配を行なうこととなります。中世・近世を通して、その下で働く人々の造宮組織としては、「作所」というのが伊勢に置かれています。両宮に、各一人ずついて、基本的には、内宮の荒木田氏では藤波、外宮の度会氏では松木、この家の人が、遷宮作所といつて、中心になりました。そして、その下に、「小作所」というものが出来て、造宮の任にあたっています。外部からは、あまり人は来なくなっています。ただ、外宮では、小作所は早く無くなったようです。ですから、ここに住んでいる神領民を中心にして、奉仕をしていく形に切り替わっていったということです。そして、「頭」と書いてありますが、「頭工」です、内宮では、一・二・三の頭を作つて、のちには四頭、それから外宮では三頭、一・二・三、何とか三頭大夫とか、そういった名前で呼称します。要するにグループで、一から四のグループに分けて、それぞれの役割を担うこととなります。外宮では、三つのグループに分けて役目を担い、そのトップが、「頭」といわれているものです。そして、その下には、「頭代」あるいは「小工」、そういった人々が四十四人ほどいました。ですから、地元の人で構成される大工集団が、ここに生まれてきたということです。そして「忌鍛冶」、これは神宮の社殿を建てる時の釘や、祭りの時に使う鉄製の「人形」を作つたりしています。あるいは小さな刀子などの祭具を作つたりする時に、鉄を使います。そういった集団は、明治までずっと続いていました。この伊勢の町では、二十年ごとの式年遷宮を具体的に果たすための組織が、存在していたと理解して頂いたら結構だと思えます。

五、御杣山と伐採

そして、檜の用材を切り出す御杣山は、時代とともに変遷しています。当初、内宮は神路山、今の五十鈴川の上流域です。外宮は高倉山、御社殿のあるすぐ南の山です。その当時の史料はありませんが、後世の史料に、古くは神路山で伐ったとか、あるいは高倉山で伐ったということが書かれていて、第一回目はどこかというところ、後世の史料でしか考えることができません。その後、神路山や高倉山の材が枯渇していきます。これは、後でお話しするように、別宮あるいは摂社への式年遷宮の拡大で、材が枯渇していくこととなります。そして、内宮では寛仁三年（一〇一九）に志摩国、外宮では阿曾山（現、大紀町）へ移ります。それから、江馬山（現、大台町）というのがあります。宮川の上流です。阿曾山は、宮川上流の支流である大内山川流域の山で、平安時代の終わりから鎌倉時代にかけて、宮川の上流に移ってしまいます。そして、内宮では、康永二年（一三四三）に、三河の設楽山（したらく）に一時期移ります。これは、南北朝期の騒乱で、宮川の上流で伐ることができなくなったからです。なぜかと言うと、南朝方に属している人と、北朝方に属している人とは、南伊勢を中心とするような状況で、都から造宮使が来ることができなくなってくるような状況下で、木そのものも三河に求めざる得なくなったというわけです。そして、室町時代は、ほとんど美濃山、現在で言いますと岐阜県で材を伐っています。さらに両宮の式年遷宮が復興する天正十三年（一五八五）には、内宮は宮川上流の江馬山、外宮はさらに上流の大杉山、今の大台町で伐っています。江戸時代になると大杉山で、まづ木を伐っています。江戸時代の式年遷宮費用は、全額江戸幕府が出しています。大杉山は、紀伊徳川家の領地で、木曾山は尾張徳川家の領地で、そこから木を伐ることになります。その後は、大杉山から伐ったり、木曾山から伐つ

たりしています。最終的には、大杉山はかなり上流まで行かないと木が伐れなくなります。木はありますが、河原が岩場で水を堰き止めてダムを作っても、下流まで流すことができません。木はあっても伐れない。要するに、筏に組んで下流まで流すと、木が傷ついて、諦めざるを得ないということになります。最終的に木曾山で一本化され、現在まで続くこととなります。ただ、木曾山については、明治になってから、問題が起こっています。木曾山は、もともと尾張徳川家の領地で、そこで木を伐っていました。今回の第六十二回式年遷宮で使われる御用材は、樹齢が二百年から三百年のものを主に使っていますから、尾張徳川家が植林した木を使うこととなります。尾張徳川家が植林した木が、三百年育って、それが今利用されるという形になっています。

明治三十九年（一九〇六）には、二人の人が明治天皇に、材木をこのまま二十年毎に伐り続けていくと枯渇します。掘立柱式で直接土中に据えると早く腐ってしまうので、礎石の上に建て、さらに床下を全部コンクリートで固めれば、五十年・六十年持ちますので、その間に植林した木が育ちますからいかげじょうか、と奏上されたようです。しかし、明治天皇は、神宮は日本古来の建物のあり方を踏襲すべきだということで、木曾の御料林の中に、式年遷宮用の「神宮備林」、八千町歩を設定しています。但し、戦後は、この神宮備林も法律的根拠を失っています。皆さんもご存知のように、木曾の木も、最終的には枯渇するでしょうし、これは大変なことになりますから、大正十二年（一九二三）から五十鈴川の上流で檜の苗木を植林しています。今年の第六十二回式年遷宮では、二割ほど、間引きした八十年物の材を使っているということです。そしてもう一つは、昭和三十四年の伊勢湾台風で、両宮の参道に生えていた三百年ものの杉の巨木が、たくさん倒れ、外宮では、御饌^{みけ}殿で、日別朝夕大御饌を奉るために、暴風警報が出ている中、木がばたばたと倒れている中を、一日も欠かすことができないと神職さんが命がけでお供えしたということがあったようです。その倒れた木を売って得た利益で、宮崎県に神宮の御柚山を設定したと言われています。しかし、宮崎県

で育った檜と五十鈴川上流で育ったものとは、どちらがよいかというと、間違いなくお宮の建っている自然環境の中で植えられ育った木が、極めて意味があります。宮崎県では、九州の温かい環境で育ったものですので、この地で合うかどうか問題です。そういうことも、現在考えられているということですが、ここにいる私たちの誰もいない頃に、遷宮用材として使われることを、この機会に知って頂きたいと思います。

そして、伐採は『延喜式』を見ますと、「孟冬始」とあり、ここには前年とか二年前とか三年前とか、一切書いてありません。孟冬としか出てきませんが、孟冬とは十月です。最初、高倉山とか、神路山で材を伐っていた頃には、前年か前々年ぐらいに伐採していたのではないかと思います。なぜ十月に伐採するかといいますと、十月（新暦では十一月）は木が水をあまり吸い上げない時期ということですが、夏場は、どんどん水を吸い上げて、そういう木を伐って使ったら、水膨れ状態の材木で、お宮を建てたらあつという間に乾燥してねじれ、自ら分解して倒れてしまうと言われています。また、十月とはどういう時期かと言いますと、神宮では九月に神嘗祭を行なっていますので、この地域では、お米の収穫がほぼ終わるころで農閑期、収穫が終わった後で、神戸からの民を伊勢に集めやすく、労役可能な時期に当たります。式年遷宮を行なう中で、一番注意されていたのは、何かと言いますと、農繁期にはいけないとされていたようです。米を作り収穫してない時期に、遷宮の仕事はしないということが、大前提になっていることも、注目して頂きたいと思います。神宮の祭り、神嘗祭は稲の祭りです。式年遷宮の仕事で、米が作れなかったということがあってはいけないわけです。そういったことも十分に考えて、孟冬という時期が示されていることに注意して頂きたいと思います。そして、古代末には遷御の四年前に、木を伐るということが行なわれています。

ここで少し見ていただきたいのは、平安時代の式年遷宮の記録である『遷宮例文』というものです。長暦二年（一〇三八）から嘉元二年（一一三〇四）にわたる十五回の式年遷宮、あるいは臨時遷宮、仮殿遷宮の記録をまとめたも

のです。そこには、「二十年に一度の造替遷宮は、皇家第一の重事、神宮無双の大宮なり」と、式年遷宮が天皇家にとつて、もつとも大切な造営であると記しています。その後を見て頂きますと、十七・十八・十九・二十年と、四年間の行事が記され、十七年の孟冬に山口祭「山口の神を祭る」ことが出てきます。十八年には木作始、十九年の中秋には御上棟、二十年の晩秋九月には遷御をしていたことが出てきます。つまり平安時代には、四年ほど前に、木を伐っていたことが分かります。もう一つの史料『文永三年遷宮沙汰文』、これは文永五年（一二六八）の外宮第三十一回式年遷宮の記録です。これを見ますと、驚くようなことが書いてあります。八月十日に、外宮の棟持柱と壁柱を、国々の人夫、この頃はまだ、先に述べました国々の神戸から、人々がやって来たことが分かります。そして、阿曾御園、御園と書いてありますが御杣山に、十日に来て、十一日の夕から陰雲とあり、曇つてきて、十二日になったら雨が降つて用水ができました。水を溜めるダムが作つてあつて、そこに、水を溜め、十五日には槻瀬、これはどこか分かりませんが、外宮に近いところの瀬に引き上げたという。そして、御柱少々、宮地に付け進められ、十六日に御棟持柱二本、宮地に付け奉る、ということと、宮域に運んだとあります。十日に山に入つて、十二日には上流から流して、十六日には宮地に運んだとあります。そして、ここに二頭方とか、三頭方とかに分かれた工人たちが、二の鳥居の内にて、長官・傍官、長官は禰宜のトップ（一禰宜）です。それから、傍官である二禰宜・三禰宜などがこれを曳き奉ります。要するに、二の鳥居から御木曳をやつたと書いてあります。その時には、木曳きの音頭を歌つたとあります。頭工三声、音頭を三回唱えたとあります。そして、「御柱今日皆以て付け進められ訖んぬ」とあります。二十三日には、「正殿御上棟遂行せらるべし」ということですから、山から一気に川を流して、十日前後で建てています。

このことから、現在行なわれている「寝かせ」というのは行なわれていなかったことがわかります。現在、神宮では八年前に木を伐り、四年か五年近くは寝かせています。池に一度入れて水漬けにして、そして、天然乾燥場に入れ

て、木が安定するまで置いています。これを見ると、寝かせはやっていません。それから、もう一つは、江戸時代ころに始まったと言われる「背割り」というものもやっていません。皆さん、最近復元された平城宮の大極殿を見ていただくともいのですが、復元大極殿は、古代の工法を忠実に再現しており、柱には背割りがしてありません。夏場に行っても、ひび割れがごくあります。現在、柱の大抵は、芯に向けて背が割ってあります。日本の冬は乾燥し、夏は湿潤になり、縮小・膨張を繰り返します。皆さんの家も、柱の見えない内側で、すべて背割りがしてあります。皆さんが宇治橋を渡る時、前後にある鳥居は、内・外面正宮の棟持柱を用いています。触って頂くとつるつるしています。背割りをして別の木を埋め込んだのが分かります。これは、二十年保つための工夫です。これは、室町時代中頃に縦挽鋸ができたことによるものです。ですから、江戸時代以前と以後では、建築工法上、大きく変わっていることになります。それから、室町時代の中頃には台鉋が出てきます。それまでは檜鉋あるいは手斧ちゅうなで削っており、表面が縞模様で亀の甲羅のようになりますが、台鉋が出ますと、表面が奇麗につるつるになります。したがって、建築上のそういったことを考えて、現在の工法を考えないといけないと思います。当時の大工道具、当時の工法とこのを十分に考えて、二十年毎という問題も考えていかないといいないと思います。

そして、現在、檜の用材は、二、三百年物が一万三千八百本、それから萱が二万三千束、社殿のある三十二の宮社に使われるそうです。そして、この六、八年間かけて、萱が採取されています。これは、昭和十七・八年に度会町の川口に、御萱山が造成され、ここで生産された萱が使われます。昨年、学生と一緒に「神宮用度の地を巡る」と題して、この山にも行きましたが、そこでこの萱を管理している人からお聞きしたのですが、萱といってもススキだそうです。萱とススキでは、イメージが違います。ススキは、私たちの家の周りにも結構生えています。神宮の御屋根に、ススキが葺いてあると思ったら、草葺きかということになってしまいます。だけど、この分厚く葺かれたススキが

二十年間、屋根を守って雨漏りを防いでいるという、そのことを考えた古代人の知恵、自然の恵みを、最大限に活かしていることが、強く感じられます。大陸から、瓦が伝わったにも関わらず、決して瓦を使っていないということです。それから、大学近くにある光明寺（伊勢市岩渕町）に伝来した文書ですが、現在、光明寺には一部を残してほとんどありません。そこには、「御神材川曳役夫并日食米員数注文」というのがあり、前の方が欠けていますが、宮川の上流、阿曾の御杣で木を切った時の役夫の食料を請求した注文です。全部は載せていませんが、一人一日、朝夕各二合、米が支給されています。総人数、九七一人分が残っています。延べ人数にして、三三二七人が、承元四年（一一二〇）、鎌倉時代初期に、阿曾御杣山まで行って木を伐ったというものです。ものすごい数の人が、山に入って木を伐って、宮川を下しています。中世初頭の御杣山の労働を具体的に知る上で、大変貴重な史料です。

六、御神宝装束の製作

それから次に、御神宝装束ですが、古代から式年遷宮が中絶するまでは、神祇官の西院で作っています。神祇官の西院を工作場として、御神宝装束が作られています。内宮は、十九種類。これは、延暦二十三年（八〇四）の『皇太神宮儀式帳』に記されたものです。そして、同じ年の『止由気宮儀式帳』には、外宮の御神宝が載っていません。外宮は『儀式帳』の編纂された九世紀初頭には無かったことになります。平安時代中頃になってから、外宮の御神宝は追加されたというように考えられています。それから、御装束ですが、これも同じく神祇官の西院で作られています。鏡は、御神宝では無くて、御装束です。この鏡は、内宮は丸い形の鏡ですが、外宮は八稜鏡とよばれる稜のある鏡です。この鏡の型式は、文様を含めて平安時代の和鏡に属します。古墳時代とか奈良時代の鏡ではありません。です

シンポジウム「伊勢の式年遷宮を考える」

から、外宮の鏡が、御装束の中に追加されたのは、平安時代になってからです。つまり、外宮に関しては、御神宝装束の奉獻は、内宮に比べて、もっと遅れるというように、理解したらよいと思います。

そして、その御神宝装束の製作については、『延喜式』によると「造神宝装束使」がまず任じられます。太政官と神祇官の役人が、御神宝御装束作りに関わっていることを注目していただきたいと思います。使いの中に、女孀にょじょう二十一、仕女二人という女性が加わっているのは、布帛類の裁縫をする女性たちです。こういった女性も、関わっています。そして、神宝を作る時には、「本様使」が神宮へ派遣されます。何かと言うと、二十年前、またそれ以前の四十年前の東西宝殿に納められている御神宝装束を見に来ます。そして、図に写して、都へ持って行って、そして、作るということになっています。次に、その出来た御神宝装束は、「送神宝装束使」が派遣され、伊勢に運ばれてきます。今は、近鉄電車で日帰り出来ますが、当時は五泊六日しながら、伊勢まで持つて来るという大変なことでした。唐櫃に入れて、担いで持つてきたということです。牛車とか馬車とかそんなものはありませんので、これを人間が担いで、奈良あるいは平安の都から、伊勢まで持つて来ていたのです。そして、持つてきた御神宝・装束については、「神宝誂合かきあわせ」というのがあります。現在もやっていますが、御神宝装束の数量・色調・材質等の確認をし、規格外の物は作り直せとって、かなり厳しくやったようです。江戸時代以前は、二回前の旧御神宝装束は、燃えるものは焼却し、燃えないものは人目に触れないように、土に埋めるとというのが、原則であったようです。一部、大宮司、欄宜さんたちに徹下した場合もあったようですが、これは本来的なものではありません。

内宮の御正殿、東の御敷地、今、私たちが参拝させて頂いているお宮の敷地内（平成二十五年十月二日以前の敷地）から出土したものがあります。平安末から鎌倉時代までのものです。現在御神宝として納められている玉纏御大刀は、随分形が変わっています。基本的には、直刀ですが、室町時代に出来たものを見て頂くと、刀身が反っています。

そして、三輪玉をつけた曲金がほぼ真丸い形になっています。あれほど規格外は作り直せと言いながら、こういったものが、出てくるということは、必ずしも厳しく伝習されていなかったということにもなります。例えば、室町時代の雑作横刀ですが、これも反っています。直刀が、反っていることによつて、必ずしも厳密なものを作っていないかった。ただししかし、これは、式年遷宮制度が衰えている時のもので、もっと古いもの、おそらく宮城内のどこかに埋もれていると思いますが、それとの比較をしないといけません、必ずしも厳しく守っていたわけではなかった時代もあつたのではないかと思います。

ただ、『延喜式』を見ると注目すべきことが書いてあります。御神宝装束の制作というのは、どれぐらいの期間で作つたかという、古代では七月に作り始めて、九月には内宮・外宮へ持って来て納めています。わずか三か月ぐらいで作っています。それだけの技術が、この時代にはあつたということになります。今は、八年あるいはそれ以上の年数をかけないと作れないものになっています。こういったことから、式年遷宮の中には技術の伝承ということが、極めて重視されるようになっていますが、古代においては御神宝装束は、何時でも作れるような技術があつたということに、注目して頂くと良いと思います。江戸時代では、どこで作られていたかといえます。やはり京都で作っています。「林阿弥」という人が中心になって、十一の家が決められて、そこで御神宝装束が作られています。

現在では、技術の伝承が極めて難しい特殊な品物ですので、一般の人が注文することはありません。二十年毎に、神宮から注文を受けて作られるものですので、人間国宝とか、あるいは重要技術伝統保持者といった人々が、作っているということ。そして、材料については、限りなく最高の素材を使います。そして、それは日本産でないといけないということが、前提になっています。若干違うものもあるようですが、世界中から輸入した材料を使わないということ。この日本の土地で生まれたもの、日本の土地にあるもの、それを使うということが、この式年遷宮の

御神宝装束の基本になっていることを、私たちはしっかりと考えないといけないと思います。今、日本では、世界の資源を集めて使い、どんどん捨てています。大量消費社会ということになっていきますが、神宮の御神宝装束について言えば、日本にある材料で、二十年毎に確認しながら作っているということをしつかりと理解しておくべきではないかと思えます。

例えば、よく言われているのは、須賀利御太刀すがりのおんたちに使われる四枚の鳥の羽根、これは鶺鴒とぎの羽根です。第六十回の際には、日本に鶺鴒が数羽しかいなくなつて、第六十一回の際には、絶滅するのではないかとということで、余分に四枚頂いていたようです。ところが、その後、中国に鶺鴒がいることがわかり、ほとんど日本の鶺鴒と変わらないと言われていきます。だけど、中国にいる鶺鴒から羽根は貰えない。中国から、日本へ贈られたつがいの鶺鴒から生まれた日本生まれの鶺鴒でない、この羽根は使えないということです。このことは、限りなく日本の現在、日本の現状を二十年毎に考えるということなんです。二十年前にはざらにいたけれど、二十年後はどうなるか分からないということが、式年遷宮を通じて確認されているというように、理解していただければと思います。現在、鶺鴒は佐渡でどんどん増えてきつつありますから、少し安心しました。しかし、矢の羽根に使う大鷹、これが現在絶滅危惧種に指定されています。ですから、この絶滅危惧種の羽根を、相当数必要としておりますので、これが十分に手に入れられるかどうか、今後問題となつてきています。例えて変かもしませんが、御神宝装束を作っていただけ人間国宝とか重要技術伝統保持者という人々も、人間世界で言つたら、絶滅危惧種に当たるのではないかと思えます。これらの人がいなくなつたら、完全に技術は消えてしまふ、途絶えてしまふ。またそういう面では、絶滅危惧種に当たります。国宝に指定されても、絶滅が危惧される状態になつていくということです。

現在、こういった御神宝装束類も、大正九年（一九二〇）に、「御装束神宝古器調査会」が発足して、伝世された

古物や古典にあたって、旧態に復すことが行なわれ、一番素晴らしい御神宝装束が、天照大御神・豊受大御神に奉獻されたのは、昭和四年（一九二九）の式年遷宮の時のものと言われています。こういったことも、注目していただきたいと思います。

七、式年遷宮の歴史

次に、式年遷宮の歴史について、お話したいと思います。制度が制定されたのは、何時かと言いますと、『太神宮諸雜事記』、あるいは『二所太神宮例文』という書物によって、理解していいと思います。ただし、『日本書紀』には、天武天皇が崩御されて、持統天皇の時に行なわれた第一回式年遷宮のことは、全く出てきません。そして、『太神宮諸雜事記』は、鎌倉時代始め頃の書物ですから、こんなに古い時代のことを正確に記しているのはあり得ない、と言って疑う人がいます。式年遷宮は、もつと後に始まったと言う人もいます。私は、間違いなく持統天皇四年（六九〇）に内宮、同天皇六年に外宮で行なわれたと考えて良いと思います。『日本書紀』天武天皇元年（六七二）、壬申の乱の時に、朝明郡の迹太川とのおで、天照大御神を望拝したことが出てきます。何故、式年遷宮が天武天皇、あるいは持統天皇の時に始まったかを考える上で、この記事は極めて重要です。一般に、天照大御神を望拝したと言うと、「伊勢神宮」に向かって、望拝したと理解しますが、私はそうは考えず、「日の出の太陽」を拝んだというように理解しています。これは、『日本書紀』を見ますと、吉野を脱出してから、昼夜兼行で走っています。男性は、途中で馬に乗っていますが、持統天皇は、「輿」に乗っていたとあります。今のように、舗装してある平坦な道ではありません。吉野から菟田を通じて、名張・伊賀を通じて、加太峠を越えて、鈴鹿に入ってきました。丁度、鈴鹿辺りに来ると、黒雲が

出て、大雨が降り始めました。「夜」であり、稲妻が光り、そして、『日本書紀』を見ますと、持統天皇が非常に疲れられたので、三重郡家の屋を棟焼いて、暖を取ったとあります。だけど、暖を取っても、雨が降っている訳ですからよく燃えませんし、ここで、温まるまで待つていたら、追っ手に掛かって、命を無くすことになります。やむなく、更に桑名の方に向かって進んだとあります。丁度その時に、三重郡と朝明郡の境の迹太川、私は四日市市を流れている海蔵川の下流、近鉄の駅に阿倉川という駅があり、万古焼で有名な地域ですが、そこを流れている川が、丁度、三重郡と朝明郡の境を流れる川で、正に「朝が明ける郡の入り口」で、天照大御神（日の出の太陽）を望拝したことになります。ただし、これはこのとき従軍した安斗智徳という人の日記を見ますと、「辰」の刻と出ています。『日本書紀』では、「旦」とあります。「旦」は、水平線から太陽が出た日の出を示した象形文字です。そして、「辰」というと、現在の午前七時から九時ぐらいの時刻です。望拝したのは六月二十六日で、現在の暦に直すと七月の終わり頃で、どれぐらいに日の出があるかと言いますと、五時頃には明けています。七時から九時と言いますと、かなり上まで太陽は上っています。何故その時に、天照大御神、日の出の太陽を望拝したかと言いますと、真つ黒い雲間から、太陽が光と熱を注いだということです。三重郡家の建物を棟焼いただけでは、十分な暖は取れなかった。ところが、太陽が少し雲間から出て、光と熱を注いでくれただけで、救われた思いをされたわけです。私は、この時の持統天皇の思いは、大変強いものがあつたと思います。何故かと言いますと、吉野から「輿」に乗ってずっと来たら、どのような状態になっていたか。平坦な道だったら良いですけど、山坂を上下し、道を右左し、雨でぬかるんだ道なき道を、一目散に走って来ているから、持統天皇は「輿」に体を縛り付けていたと思います。でなかったら、「輿」から転げ落ちていたと思います。三重郡の境辺りまで来て疲れたという状態は、完全に船酔い以上のものとなり、青ざめた状態で、その上、雨が降って、稲妻が鳴って、ずぶ濡れになり、寒さに打ちひしがれる中、三重郡と朝が明ける郡と

の境で、日の出を拝むことができたということは、極めて大きな感慨を持たれたと思います。天武・持統両天皇は、まさに天が助けてくれる「天佑」が示されたと感じ、確実に壬申の乱に勝利できる、ということを確認されたのだと思います。両天皇は、このとき、九死に一生を得るような大変なお蔭を頂いた。だから勝利した暁には、此の感謝をどのように示すかを、考えられたのではないかと思います。

天照大御神に、感謝をどのようにして示すかと言ったら、中々難しいわけです。私はいつも色んな所でお話ししていますが、天照大御神、太陽から、光と熱の代金請求書突きつけられたら、私たちは払えるかと言うと、間違いないと思いません。請求書が突きつけられることが無いということが分かっていますから、安心してはいますが、原子力発電所があれだけの事故を起こし、火力発電所の燃料が高くなって、電気代が上がっています。それだけで、私たちは、一喜一憂しているわけですが、残念ながら、太陽に対して一喜一憂することは、殆どありません。タダ同然の様に、光と熱を頂いているわけです。ですから私は間違いなく、太陽の神、天照大御神を祭る神宮の御社殿を新しくさせていただく、式年遷宮を思いつかれたのだと思います。

御正宮は、間違いなく倉ではありません。よく神宮の建物は、弥生時代の伝香川県出土の銅鐸や奈良県唐古鍵遺跡出土の土器絵画に描かれているように、棟持柱を持った建物、高床式倉庫、倉だという理解がされていますが、これは倉ではありません。なぜかと言いますと、この棟持柱で支えられている建物の周りには、回廊、廊下が巡っています。そして、回廊が巡っている欄干の部分には居玉と言った五色のガラス玉が飾り付けられています。今度、平城宮の復元大極殿に行つて頂いたら、ここにも、ガラスの居玉が据え付けられています。それから考えますと、天照大御神のお住まいである「屋・家」です。倉ではありません。それに、敬称の「御」を付けますから、「御屋・御家」となり、「みや」と読むことになります。式年遷宮が始まった時の状況を考えますと、御正宮は天照大御神の「みや」、

住まわれる建物と理解してよいと思います。

そして、式年遷宮が始まる以前はどんな状態だったかと言いますと、おそらく、荒祭宮と和魂の宮の御正宮が、瀧原宮・瀧原並宮と同様、並立して建っていたのではないかと思います。並立してお宮が建っているのは、このほか月読宮と月読荒魂宮が同じ状況です。私は、式年遷宮が始まる以前は、御正宮のすぐ後ろにある荒祭宮の所に、両宮が並び建っていたのではないかと考えています。そして、『太神宮諸雜事記』を見ますと、「遷宮之年限を定め、又外院殿舎・倉・四面重々御垣等、造り加えらる也」と書いてあります。外院殿舎・倉・四面重々の御垣が付け加えられたと書いてあります。四面とは何か、東西南北、重々とは何かと言ったら、二重、二重で重々です。四重の垣根（板垣・外玉垣・内玉垣・蕃垣）を、付け加えたことになりました。元々、式年遷宮が始まる直前の姿は、どういう形かと言いますと、瑞垣しか無かったのだろーうと思います。そこに、宮域を拡張して、現在のような姿になったと思います。これは明らかに、正殿を中心に南北に長い宮域を設定しています。こういう建物を、現在の荒祭宮の宮域に造ることは不可能です。だから、全く新しく敷地を考えて作りだしたのが、現在の正殿宮域ではないかと思えます。この姿と非常によく似ているのが、平城宮です。前期平城宮、聖武天皇が都を遷す以前の姿ですが、これは東西に二つの内裏、二つの朝堂院がある形をとっています。

私は、この式年遷宮が始まった最初の頃には、古いお宮は壊したのかというと、壊さずに残した可能性があるのではないかと、というように思っています。と言いますのは、江戸時代、式年遷宮が復興してから十三回、古宮は壊さずに、四十年間隣に建っていたようです。万が一の時を考えて、隣に建っていた。そのことから考えますと、二回目以降の式年遷宮の頃にも、隣に古い建物が建っていたのではないかと考えています。そういうふうに考えますと、平城宮は、中国の都城制に倣って二つの宮を並列させたとされていますが、神宮の東西に御敷地を定めて、並立して建て

ている姿が、人の宮に再現されたのが、平城宮ではないかというように考えています。こういったことも、少し注目して頂くと良いと思っています。

別宮の式年遷宮は、天平十九年（七四七）の第四回内宮式年遷宮、これは『太神宮諸雜事記』に出てきます。丁度この時、日本で何があったかと言いますと、東大寺の大仏、毘盧遮那仏、これは「太陽の仏」であります。この仏像にメッキする金が不足していましたので、金の出現を求めて、天照大御神を始め、全国の神々に祈りを重ねて、ようやく下野国、現在の栃木県から出たと言われています。残念ながら、これでは盧遮那仏にメッキするだけの量がありませんでした。糠喜びでした。だけど、丁度それが、内宮の第四回式年遷宮の年にあたっていましたので、これは正に天照大御神のお力添え、御神助だと考え、別宮にまで遷宮を拡大したのだと思います。そして、この時に、御正宮の飾り金物、建物の金具に金メッキを施すことにしようです。そのことを示しているのが、正倉院文書の「飾金具注文」です。福山敏男氏の研究によれば、ほぼ天平十九年の式年遷宮の時が良いと言われています。それまで、皇大神宮は白木造りで、銅か鉄の飾り金具が付いていた可能性があるようですが、それに、金メッキを施した飾金具が付られたのが、この文書と考えられています。その後、さらに祈られて陸奥国から多くの金が出現したことで、大仏の金メッキが可能となっています。

その後、摂社の一部で遷宮が開始されています。内宮では、朝熊・蘭相・鴨・田乃家・蚊野・湯田、外宮では月夜見・草奈伎・大間社が対象になっていますが、私は第五回内宮式年遷宮の天平神護二年（七六六）に行なわれたのではないかと考えています。何故かと言いますと、天平宝字八年（七六四）に、恵美押勝の乱が起っています。孝謙上皇、のちの称徳天皇は、押勝の兵に襲われて命を落としかけたのですが、改元の詔に、「幸いに神霊の国を護り、風雨の軍を助くるに頼りて、旬日に盈たずして、咸誅戮に伏しぬ」とあるように、神の護りをうけたことにより、命

が救われ、年号を天平宝字九年から天平神護元年と変えています。神が私たちの国家、神が私たちの命を助けてくれたという思いが強くて、「神護」という年号に改めているわけです。おそらく、この時に、神宮への更なる感謝の気持ちを示すために、摂社の一部にまで式年遷宮を拡大したのではないかと考えています。正宮・別宮だけを新しくして、土地の神々を祭る摂社が傾いたり、雨漏りをするような状態では、天照大御神・豊受大御神以下、別宮で祭る神々に安んじて当地にいていただくことができないと考え、摂社の中で重要な社の遷宮を始めたのではないかと思います。そして、丁度その時には、道鏡が政治の中心で権勢を振るって、仏教的な政策が進んでいましたので、神宮を守護するための伊勢大神宮寺（逢鹿瀬寺）が建立され、天平神護二年には使いを遣わして丈六仏像を造ったのではないかと考えています。なお、『延喜式』の大神宮式に、多気郡鎮座の須麻留売・佐那・櫛田の三社が、神宮の摂末社に含まれていないのに、式年遷宮の対象になっています。このことについては、天平神護三年（七六七）六月十七日に豊受宮の上、七月七日には皇大神宮の上に、五色の瑞雲が見えたことで、神護景雲と改元し、あるいは多気郡に所在する齋宮に美雲が見えて、年号を天応元年（七八二）と改めたときに、神宮の式年遷宮にあわせて、多気郡の中でも重要な三社の遷宮（須麻留売・佐那・櫛田の三社は、外宮神主度会氏との関わりが深く、神護景雲二年の第五回外宮式年遷宮に合わせて遷宮が行なわれた可能性が高い。）をするようになったのではないかと、考えています。

遷宮の中絶については、乱世による遷宮費用の調達が難しくなったこと、また用材の運送や伊勢への道が通れなくなった状況もありますが、出来なくなった根本的な原因は、応仁の乱だろうと思います。応仁元年（二四六七）から十一年間、京都の町が焼け野が原になり、造宮使が派遣できない状況が生まれ、あるいは造神宝装束を任じることができなくなったことです。派遣しようにも、造宮大工や御神宝装束を作る技術者が、京都の町からいなくなり、造ることができなくなったということです。この結果が、式年遷宮を完全に中絶させてしまう原因になったと考えてい

ます。ですから、式年遷宮を考える上で、何が大事かと言いますと、日本の国が平和で無いと遷宮は行なえないという事です。この先、二十年後に式年遷宮が出来るか否かは、国が安泰であるか否かに関わってくるという事です。それから遷宮が、復興したのは、外宮は永禄六年（一五六三）で第四十回、両宮の式年遷宮は天正十三年（一五八五）で第四十一回となっています。式年遷宮の復興に、慶光院の尼僧である周悦・清順・周養上人が大きな役割を果たしたと言われています。慶光院の尼僧は、もと熊野の比丘尼と言われており、宇治橋の架橋に深く関わっています。この頃、宇治橋前にはたくさんの参宮人が来ており、その中で、宇治橋はどのように利用されていたかというところ、風日祈宮橋もそうですが、渡る前のこちら側を此岸、渡った向こう側を彼岸、死後の世界と考え、そして真ん中が太鼓橋になっていますから、参拝人はまずこの橋のたもとで生まれ、一番高い所が人生の絶頂期、一番よい時期、そして向こう側へ行ったら死ぬことになりますという話をしていたようです。熊野の比丘尼達は、宇治橋を使って、このような絵解きをしていました。向こう岸で、死んだら誰が助けてくれるかと言うと、天照大御神が助けてくれるということと話していました。向こう岸で一度死んで、天照大御神に助けられ、黄泉よみ帰り、再生をするわけです。ですから、橋が洪水で流れてしまうと、絵解きができなくなります。絵解きができないと困りますので、宇治橋の架橋をするために、諸国への勧進（募財）が始まることとなります。ところが、橋が出来ても、助けてくれる天照大御神のお宮が朽ち果て、倒れ掛かっていることになれば、有り難味がありません。ですから、内宮の式年遷宮を行なおうとされます。しかし、内宮側の荒木田氏は、尼僧がそんなことをする必要はないと断りました。何故かと言いますと、神宮は仏教を嫌って、仏教的なものを遠ざけていましたので、仏教徒、それも女性の尼さんに、諸国を廻って募財してもらう必要はないということです。この時、外宮側も一旦断りましたが、外宮の詔刀師のこし、これは「御師おんし」ですがで、足あ代弘興じろひろむねという人が協力して、遷宮が復興されます。慶光院の清順上人は、山田の御師足代弘興邸に止宿していたよう

で、弘興の協力で遷宮のための勧進が行なわれ、遷宮ができました。女性が一人で行くというよりも、御師がかなり関わっていたのではないかと考えています。一般の家を廻るのではなく、戦国大名のもとを廻った訳です。清順上人は、後奈良天皇の繪旨を奉じ、諸国を勧進し、外宮の遷宮を、先に始めることができました。天正十三年の式年遷宮では、慶光院周養上人が勧進をしますが、この時は、外宮の成功がありますから、両宮ともうまくいくような流れが出来たようです。

そして、注目すべきことは、慶光院上人の働きもありますが、織田信長（錢三〇〇〇貫文）・豊臣秀吉（錢一万貫文・黄金五〇〇枚）が遷宮費用を出し、江戸時代になると徳川家康（米六万俵）が出したという点です。基本的には、東海の三英傑です。これは間違いなく小さい頃から、天照大御神、おそらく豊臣秀吉は元百姓ですから、お父さん、お母さん、お祖母さん、お祖父さんから、太陽の神様、天照大御神というのは、偉大な神で、お米が実ることや私たちが食事を出来るのは、豊受大御神のお蔭だということを、小さい頃から盛んに言われ、刷り込まれているから、これだけの大金を出せたと思います。確かに天下取りの人は、名を売るために自分が国の中心であるかのように振る舞いたいという思いもあったかも知れませんが、私は小さい頃から、そういったことがあったのではないかと思います。織田信長の父親の織田信秀も、天文十年（一五四二）の外宮仮殿遷宮の時に関わっています。織田家のいたところは、神宮の神戸、中島神戸がありました。そういったことも忘れてはいけないと思います。それから、九州の人とか東北の人にお願いできるかというところ、伊勢神宮とはどんなお宮で、天照大御神は、どんな神様で、豊受大御神は、どんな神様だとかを説明し、理解してもらわなければなりません。おそらく当時は、言葉が通じなかったと思います。方言で、伊勢の人が行っても、中々相手に言葉が通じないということもあったかと思えます。大事な神、大切な神として、伝えていくには大変な困難があったかと思えます。その点、この東海の三英傑は、小さい頃から、そういった

神の有難さを十分に知らされ、教えられていたかと思えます。こういったことが行なわれてきて、江戸時代は幕府が遷宮費用(米三万石)を全額出し、山田奉行が遷宮奉行として、遷宮を統括しています。

七、二十年一度の意味

二十年に一度の意味で、考えていくべきことは、建物はぎりぎりというよりも、二十年持たないのではないかと思います。現在、御正宮の古殿と新殿が、丁度並立して建っています。見て頂いたら分かりますが、萱葺きの屋根や板葺きの屋根が、かなり腐っています。けれど、式年遷宮が前提になっていますから、修理していません。やはり悪くなってきたら雨漏りをしますから、修理をして何とか持たしていることがあるようです。柱根の方も掘立柱方式ですが、古代は柱そのものを土に直接埋めています。現在では銅板が巻いてあります。銅の青錆・緑青で、毒分がありシロアリが近づかないというように考えています。そういったことや、柱の背割りをすることによって、現在ではかなり持たせるようになっていますが、二十年持たせること自体は、かなり大変だったと思います。だけど、百年、二百年の木は、ちよつとやそつとでは、腐っていかない。私たちの家で使っているような五十年もの木は、五十年ほどで朽ちていくと言われています。百年持ちません。百年住宅と言っても、百年育った木を使っていないから、無理だと言われています。百年持たせようと思ったら、百年育ちの木を使わないといけない。二百年持たせようと思ったら、二百年の材を使わないといけないと言われています。そういうことが、まず基本にあると思います。

二十というのは、

①最大数説…人間の数えられる最大数(手の指の表裏・手と足の指)

シンポジウム「伊勢の式年遷宮を考える」

② 尊厳保持説…建物の耐用年数(素木造りの檜と萱)

③ 時代生命更新説…社会的・個人的に二〇年を一区切り(国家・社会・国民の生命の更新)

④ 世代技術伝承説…一世代は三〇年(一〇代見習い、二〇代工人、三〇代師匠)

⑤ 原点回帰説…朔旦冬至(陰暦十一月一日に冬至が来るのは、十九年七ヶ月)

⑥ 櫛保存説…櫛は二〇年を保存(倉庫令)、式年遷宮は大神嘗祭。

⑦ 陰(偶) 数嗜好説…日本人は、二・四・六・八・十の偶数を好む。

などの説がありますが、『令義解』戸令の三歳以下條に、「男女は三歳以下を黄と為し、十六以下を少と為し、廿以下を中と為せ。其れ男は、廿一を丁と為し、六十六を耆と為せ。」とあります。このことから、二十と二十一の間に線引きをしています。私も大学に入ってから、今までに式年遷宮を三回迎えました。だけど、よくよく考えてみたら、二十年前に生まれた子供が、私たちと同じように話し、物事を為しています。私たちは、二十年前とあまり変わっていません。確かに見た目の風貌は、歳相応の顔をしているかもしれませんが、人間の成長を見たら、生まれた子が、二十になって一人前の人間になっています。この単位というのは、やはり凄いい単位だろうと思います。そして私は、この二十というの、日本人好みの数字だと思えます。二・四・六・八・十の世界です。中国は、陽数の一・三・五・七・九、日本は、陰数の二・四・六・八・十を好みます。特に、八は偶数の中でも、聖なる数と考えています。例えば、八尺瓊勾玉・八咫鏡・八万神・八百屋などです。八という漢字は、末広がり字形です。そういったことから、二も陰数の始まりを示す数字で、有難い数字と日本人は考えています。丁度、持統天皇が、同天皇六年(六九二)に、伊勢に來られています。これは、九死に一生を得た壬申の乱、六七二年から、丁度二十年目に当たります。そして、十年後の大宝二年(七〇二)にもう一回、伊勢を通過して三河に行っておられます。どうして來られたかと言います

と、式年遷宮の状況を確認し、大宝律令という国家的な法律が整備されたなかで、超法規的な形で、神宮および式年遷宮の制度、特に経済的基盤（神戸の設定）を、御自身の手で整備しておきたい。百年、二百年、三百年先まで、神宮祭祀や遷宮制度を維持したいという思いが、ここには有ったのではないかと思います。この二十年というのは、そういう意味があり、聖なる数、陰数で、丁度二回・三回すると六十、還暦と同じ数の六十年となります。こういった人生の節目を考えて、二十年毎に行なわれたのではないかと考えています。

かなり長時間にわたってお話しさせていただきましたが、この後は、中世の神宮史研究で成果を上げておられる勝山先生、神宮全体にわたって研究されておられる茂木先生、それから神宮の祭祀に直接関わっておられる吉川先生のご意見をお伺いし、不十分な点は後の討論会で、補いたいと思います。ご清聴有難うございました。